

〔書評〕 廖欽彬『宗教哲学の救済論——後期田辺哲学の研究』（国立台湾大学出版中心、

二〇一八年）

河合 一 樹

一 本書の構成

本書は、現在中華人民共和国の中山大学に所属し国際的に日本哲学研究を押し進める筆者が、二〇〇八年度に筑波大学に提出した博士論文をもとに、その後の研究成果の一部を踏まえて加筆・修正したものであり、国立台湾大学出版センターの「日本学研究叢書」の一冊として日本語で出版されている。

まず本書全体については、必ずしも充実しているとは言えない田辺元の研究の現状に対して、まとまった分量を費やして体系的にその思想を明らかにし、基礎的な解釈を提供するものとして貴重な研究成果であると言いうるだろう。より内容に立ち入った評価をするために、次に目次を掲げる。

序章

第一章 「種の論理」とその挫折

第二章 後期田辺哲学の起点

第三章 歴史哲学の展開

第四章 絶対弁証法のキリスト教的展開

第五章 日本仏教とキリスト教との邂逅——絶対宗教を目指して——

第六章 死の哲学

第七章 東アジアにおける実存哲学の展開——田辺哲学と洪

耀勳の間——

結章

章題から既に推察できるように、「第一章」から「第六章」まで

と「第七章」とでは大きく性格を異にしている。「第一章」から「第六章」までは、「種の論理」に始まり晩年の「死の哲学」に至るまでの田辺哲学の展開を、田辺の著作に即して概ね時代順に考察したものであり、筆者の博士論文をもとにした内容である。それに対して、第七章はその後の研究成果を踏まえて加筆されたものであり、台湾の哲学者・洪耀勳の思想を取り上げて田辺をはじめとする日本の哲学者との関連が考察されている。

このような本書の構成に即して、本稿では以下「第一章」から「第六章」までにおける本書の田辺哲学解釈の特徴と「第七章」における台湾哲学という視座の持つ意義とに分けて内容を概観し、最後に評者の立場からいくつかのコメントを付け加えることにしたい。

一 本書の田辺哲学解釈の特徴

本書の基本的な立場は、「宗教哲学の救済論」という一貫した視座に基づいて、「種の論理」の挫折から『懺悔道としての哲学』や『キリスト教の弁証』などを経て「死の哲学」に至るまでの田辺の思索を解釈しようとするものである。

ただし、この「宗教哲学の救済論」という言葉には注意しておく必要がある。筆者はそれを「宗教の救済論」とも「哲学の救済論」とも異なつた独特の「宗教哲学の救済論」であるとし、「田辺の宗教哲学の救済論」には、宗教と哲学との対立しつづつ媒介し合うという絶対否定媒介の関係が潜んでいる。「二頁」という、すなわち、この言葉の下に企図されているのは田辺が「宗教と哲学との絶対否定媒介」を通して自らの思索を発展させていく様を描き出すことであり、さらにはそうした田辺の独特の営為の「実践可能性」をも問うことである。

その為、本書の第一章から第六章までにおいては、全ての章に渡つて田辺の思索における哲学と宗教との関係が問題となる。第一章では、後期の田辺の思想を理解する為に不可欠の前提となるものとして、「種の論理」の構造とそれが挫折に至つた理由とが論じられる。本書の議論の特徴としては、その際に『正法眼蔵の哲学私観』に大きな注意を払っていることが挙げられる。筆者によれば、『正法眼蔵の哲学私観』は「種の論理」の宗教哲学的展開を示しており、そこには絶対としての宗教（類）と相対としての歴史（種・個）との否定媒介の構造が含まれていた。そして、類は種・個の双方と関わるものであった。しかしながら、その後の「種の論理」の変化において、現実の国家（種）が宗教における絶対者の慈悲（類）を篡奪することとなつた。その結果、国家のみが宗教と歴史とを媒介する主体となり、個人は否定媒介としての機能を失つた。ここに「種

の論理」の挫折の原因があったとするならば、「種の論理」は「国家」と「個人」との関係捉え損ねただけではなく、「宗教」についても捉えることが出来なかつたと言わなければならないだろう。後期の田辺の思索が「宗教哲学」として発展した理由はこの点に存している。

第二章では、戦時中の講演「懺悔道」と戦後ほどなくして出版された『懺悔道としての哲学』とが中心として扱われる。「種の論理」の挫折の後、自らの理性の限界に直面した田辺は、「懺悔即救済」という宗教体験に導かれて他力哲学としての懺悔道哲学を構築することになった。本章はその過程を精緻に描き出している。また、「懺悔道」と『懺悔道としての哲学』との間の相違が「懺悔」「絶対批判」「三願転入」といった概念の検討を通して考察されている。筆者によれば、前者では「懺悔」によって自らが救われる「往相」の側面が強いのに対して、後者では他者を救済する「還相」も合わせて重視され「往還二相の転換運動」が強調されることになった。そして、『懺悔道としての哲学』におけるカントやヘーゲルへの批判は、それらの「自力哲学」を田辺の宗教哲学によって「救済」する試みであるという。

第三章は、『懺悔道としての哲学』における宗教哲学に更なる考察を加えるものであり、田辺が日本仏教を哲学化した過程を扱って

いる。田辺は浄土真宗を解体し世界的な宗教とする為に、絶対批判の論理によって新日本仏教を構築したという。その点についての考察の中で、田辺が単に浄土真宗を解釈しているだけでなく、禅仏教を媒介とすることで新たな日本仏教を創り出しているとする点が本書の特徴であると言えるだろう。また、本章では田辺が浄土真宗の「三願転入」と「三心釈」とを時間論として捉え独自の歴史哲学として発展させたことも論じられている。

第四章では、『キリスト教の弁証』が取り上げられ、田辺が懺悔道哲学の立場からどのようにキリスト教の歴史的發展を弁証していったのかということが論じられる。そこではユダヤ教の預言者とイエス及びイエスとパウロとの間の弁証法的関係についての田辺の見解が分析されている。また、田辺が日本仏教だけでなくキリスト教を扱うようになった理由は、キリスト教の方が懺悔の対社会的な実践性が鮮明であるからであるという点も指摘される。

第五章では、田辺が『キリスト教の弁証』の中で最終的に主張する日本仏教とキリスト教とマルクス主義との弁証法的展開としての「絶対宗教」の解釈が主題となる。日本仏教の絶対無性とキリスト教の愛の当為とマルクス主義の社会改革の論理とを活かし「絶対宗教」を構築しようとする田辺の営みは、本書によればそれぞれを死復活させる宗教哲学の救済論に基づく菩薩行に他ならないとい

う。

第六章は、田辺の最晩年の「死の哲学」を扱うものであり、特にハイデガーとの対決が主題となる。筆者によれば、こうした対決も田辺の菩薩行に他ならない。田辺の理解するハイデガー哲学は自己同一性の論理に止まる自力哲学であり、絶対無即愛に働きかけられて自己否定即肯定の転換を遂行しなければならない。田辺はそのような立場から「死の哲学」を構築した。ただし、ハイデガー哲学を救済するのは「死の哲学」そのものではない。「死の哲学」が固定されたものとなり、自己を無化することを忘れたならば、それ自体が絶対無の慈愛に対する反逆となるからである。あくまで、「死の哲学」を通して遂行される「死即愛」の救済行こそがハイデガー哲学を救うのである。

以上に見て来たように、本書は「種の論理」に代表される田辺の中期哲学と「懺悔道」以後の後期哲学とを田辺自身の宗教体験の有無によって区別している。そして、田辺の後期哲学を一貫して既存の哲学や宗教を死復活させ救済しようとする行であると捉えていると言えるだろう。

また第七章の概観が残っているのが、ここまでで既に本書の後期田辺哲学についての考察は一段落したものと見なして、結章に言及しておくことにしたい。結論では、第一章から第六章までの概要が

筆者自身の言葉で手際よくまとめられた後に、筆者自身が田辺の宗教哲学を引き受け実践していくことが出来るのかという仕方、田辺哲学の実践可能性が問われている。筆者は自らの素質に疑義を呈しながらも、田辺哲学を永遠に「完遂即未遂、未遂即完遂」の動的状態にあるものとして展開し、田辺の救済論の実践可能性を無限に問わなければならないとしている。こうした実存的問いの在り方も本書の特徴と言えるだろう。

二 台湾哲学への視線

本書の中で第七章だけを独立させて取り上げるのは、それが多少性質を異にするものとして後から加筆されたものであるからというからだけではなく、従来の研究にはない視座を提示するものとして重要性を有していると考えからである。

本章において筆者は田辺元をはじめとする日本哲学と台湾との関りを問題としている。これまで西洋哲学が日本にどのように受容されたかという研究は存在しているも、その受容を他の東アジアの国家・地域と比較する研究や、日本哲学が他の東アジアの国家・地域にどのように受容されたのかということに関する研究は希薄であったと言わざるを得ないだろう。本章は問題の大きさに比すれば

わずかな分量であるとはいえず、そうした新たな課題を提示するものとして高い価値を有する。

本章が具体的に論じるのは「実存」概念を通じた田辺と植民地期台湾の哲学者洪耀勳との比較である。筆者の紹介によれば、洪耀勳（一九〇二—一九八六年）は、一九二八年に東京帝国大学文学部哲学科を卒業した後、台北帝国大学哲学科に赴任し、京都学派に属する務台理作・岡野留次郎・淡野安太郎などとも交わった人物である。その洪耀勳が一方で日本哲学から影響を受けつつ、一方で西洋の哲学の動向と向き合いつつのような哲学を構築し、それが田辺などの日本哲学とどのような関係にあるかということが本章の主題となる。

本章では前半において、田辺の「実存」に対する考えが、「実存哲学の限界」「実存概念の発展」「実存と愛と実践」といった著作の検討を通して明らかにされる。ここでは各著作における田辺の思索が丁寧に論じられているが、台湾との比較の上で要点となる特徴としては、それが他の日本哲学と同じく西洋哲学に対して「絶対無」を以て対抗するものであったことが挙げられる。

それに対して、台湾において洪耀勳が描いた「実存」の在り方はそうした西洋と東洋の対決という課題を背負うようなものではなかったという。洪耀勳は『台湾文芸』という文芸雑誌に実存哲学を

紹介する文章を投稿した。この雑誌は当初政治的な色彩を帯びており、台湾独自の文学を創ることを目指していた。洪耀勳が「実存」を論じる際にはそうした潮流に応じつつ、いかに台湾の主体性を確立するかという課題が存していた。それは一方で田辺の「種の論理」や和辻哲郎の『風土』などの影響下においてなされたものであったが、他方では日本哲学のように西洋と東洋の対決と言った課題を背負おうとするものではなく、あくまで台湾の主体性の確立を問題とするものであった。ここに日本と台湾との異なった歴史的状況に応じつつ、それぞれの哲学者が「実存」概念を受容していった様子を見ることが出来るという。

こうした「実存」を巡る考察は、日本と台湾との哲学の比較という観点からすれば、おそらくごく一部を成すに過ぎないだろう。しかしながら、そうした視点の重要性と面白さを十全に示す点において本章は深い意義を持つものであると思われる。

三 思想史への広がり

以上に、本書の内容を概観してきた。評者による要約がどれほど本書の核心を捉えることが出来ているかという疑問は残るが、いずれにしても本書が田辺研究として価値を持つものであることに異

論を挟む余地はないだろう。他方で、評者の立場からいささか物足りないと感じられる点として、本書の大部分が専ら田辺哲学の解釈に費やされており、他の思想家・哲学者などとの関係に対する考察が希薄であることが挙げられる。

もとより、このことは本書の性格に起因することであり、筆者にそうした問題関心がないということの意味している訳ではない。既に見たように第七章における台湾哲学との比較は、むしろ筆者に自らの田辺研究を他の哲学者との関係において発展させようという強い意欲があることを示している。しかしながら、あくまで本書の叙述に限って言えば、洪耀勳についてもより広範かつ詳細な考察を聞きたくなるし、田辺の『宗教哲学』を同時代の哲学者たちがどのように受け止めたのかということも気になる。また、本書は田辺の仏教解釈にも多く言及しているが、そのことが近年盛んに行われている日本の近代における仏教の研究^①とどのように交錯しうるかということも興味深い点である。

とはいえ、こうしたことをあくまで田辺哲学の解釈を中心とする本書に求めるのはないものねだりというしかないだろう。そして、筆者は他の著作においてある程度こうした課題を遂行している。一つには洪耀勳に関するものとして、廖欽彬ほか編『洪耀勳文献編輯』^②、国立台湾大学出版中心、二〇一九年があり、他方で田辺を比較哲学

的な観点から扱うものとして、廖欽彬『近代日本哲学中的田辺元哲学——比較哲学与跨文化哲学的視点』北京商務印書館、二〇一九年がある。これらは共に中国語の文献であるが、筆者の現在の研究の広がりを示すものとして挙げておきたい。

(かわい かずき 筑波大学大学院)

注

- (1) 例えば、大谷榮一『近代仏教という視座——戦争・アジア・社会主義』、ベリかん社、二〇二二年・オリオン・クラウタウ『近代日本思想としての仏教史学』、法蔵館、二〇二二年・嵩満也ほか編『日本仏教と西洋世界』法蔵館、二〇二〇年などがある。